



低CP飼料の追求が 生産コストを軽減させ、 鶏の経済寿命を延長する

DATA 事業規模
所在地：関東地方
飼養羽数：採卵鶏50万羽

今回は、採卵鶏の性能をいかして、経済寿命を少しでも長くしたいと願う生産者が、高止まりする飼料コストを引き下げるべく日々努力する飼料会社とともに取り組んだ飼料の低CP化の取り組みを紹介する。

卵重コントロールの重要性

採卵鶏は産卵を続けるうち、産卵率が落ちる一方で卵が大きくなる。規格外の大きな卵は、殻が薄くなつて割れやすいほか、割れた卵が周辺の卵を汚す原因にもなる。このようにして良質な卵が減り、鶏の経済寿命は終わりになる。そのため、大きな卵重を制御することは、経済寿命を延長し、ヒナ代を節約するためにとても重要な技術である。

従来から飼料のCP（粗タンパク質含量）を日齢とともに徐々に下げ、卵重の増加を抑える工夫がされてき

た。CPが低いほど飼料価格を抑えられるため、高止まりする飼料価格を下げる目的で、近年はCPを引き下げる動きが活発化している（図1・図2）。

飼料会社との協力体制

今回の取り組みの背景には、従来18〜16%のラインナップが中心であった成鶏用飼料のCPを、更に下げたいという生産者の要望があった。

一方で飼料会社には、CP15の供給実績はあっても、それを下回る製品の実用化ノウハウはほとんど無かった。というのも、CPを低くし過

ぎると、飼料摂取量が増えて経済性がかえって劣り、産卵成績に悪影響を及ぼすこともあるからだ。

この問題に対応すべく、農場側では産卵率や飼料摂取量をこまめに管理し、飼料会社はその結果を飼料の品質に素早くフィードバックする体制を整えて、2010年秋から、手探りの取り組みが始まった。

その結果生まれた飼料体系が左の表である。最近ではCP14を活用し、13も成績の推移を見て使用している。原料の低コスト化も徹底し、原料情勢に応じてマイロや小麦、DDGS、菜種粕、ジャーム粕、ごま粕などの代替原料を活用。価格が高騰しているトウモロコシは、一般的な水準（約50%）の半分に留めている。

図3で示したのが現在の生産成績

になる。鶏種マニュアルの成績を十分に満たしていて、全く問題の無い成績を記録している。

夏場は飼料摂取量が減少するため、全体的にCPの水準を上げるものの、主力はCP15と14とし、一部13や16以上を使用する方法で安定した成績を継続。別の農場では、日齢の進んだ老鶏には全て13を使用し、良好な成績を挙げた例もある。

1年以上の試行錯誤を経て、環境の制御や制限給餌などのノウハウを蓄積し、一見信じられないほどの低CP飼料を使いこなすことを達成。日々進化する鶏の性能を十分に生かす、生産コストの低減に成功した取り組みは、一朝一夕に真似することは難しいものの、多くの生産者の参考にしてもらいたい事例である。

図1：年とともに高まる成鶏向け低 CP 飼料の割合

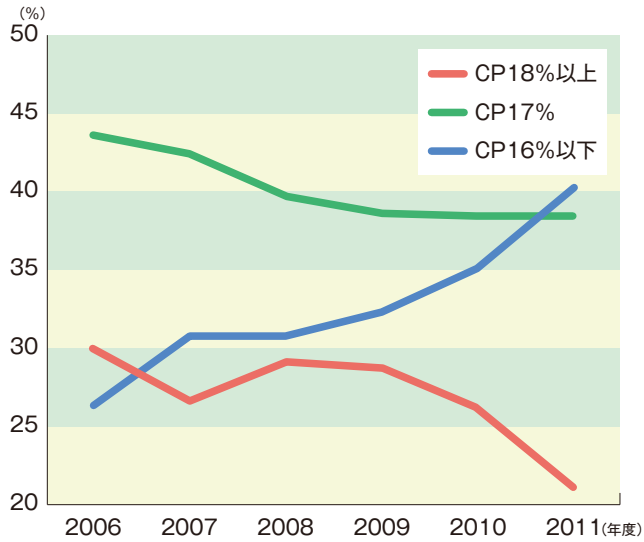
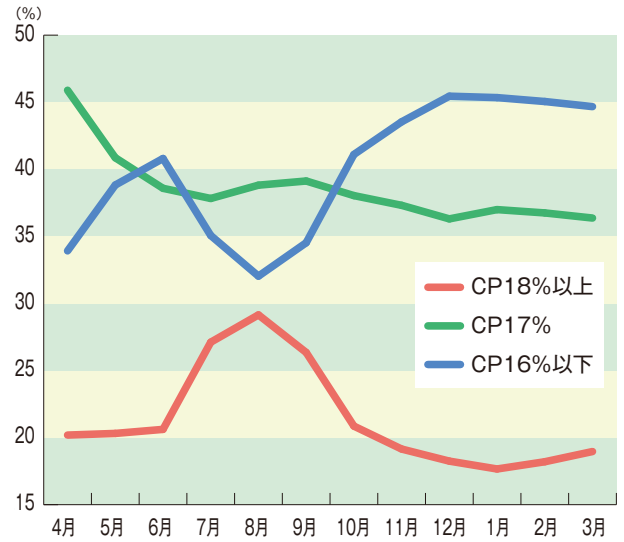


図2：2011年度は夏季を除き、低CP飼料の割合が45%にのぼった



低 CP 飼料供給の実施

表：低 CP 飼料を含む、現在の飼料体系

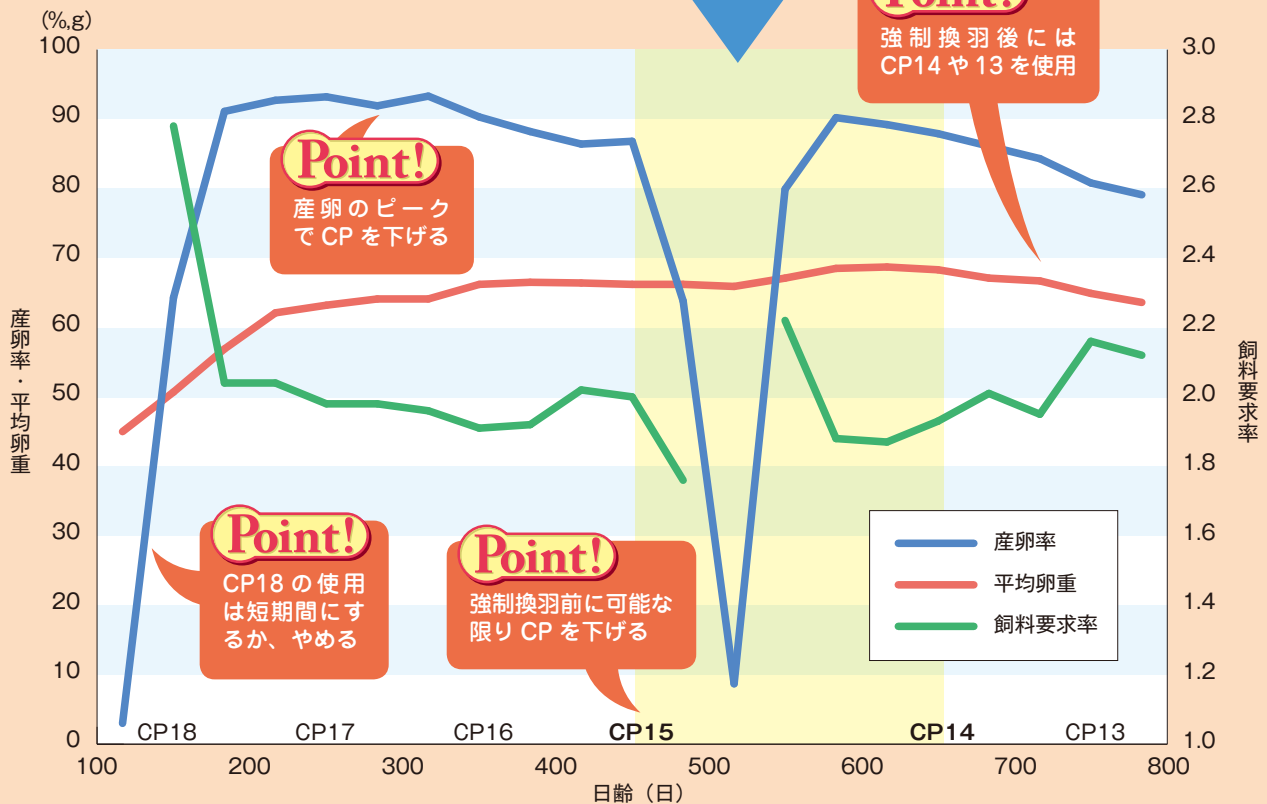
飼料CP (%)	飼料ME (kcal /kg)
18	2,850
17	2,840
16	2,830
15	2,820
14	2,800
13	2,800



CP13の飼料写真

カルシウム／リン比 up
現在主力

図3：生産成績



Point!
産卵のピークで CP を下げる

Point!
CP18 の使用は短期間にするか、やめる

Point!
強制換羽前に可能な限り CP を下げる

Point!
強制換羽後には CP14 や 13 を使用